

「仮字」の論

——百年河清ヲ俟ツか——

1

漢字に対しカナ、すなわち日本固有の文字、〈仮字〉がある。

私見では漢字を受容するようになって、それまで日本語として一体と考えられていたコトバ (thing)、たとえばコト、このコトを〈事〉と〈言〉に分化させた。人間の行為そのものの、すなわち事は、そのまま口に出した言と一体であること、俗に言行一致という考えが基本であった。しかし事は持続的であり、言は瞬間的である。観念の世界では、漢字の導き、誘発によって、コトを事と言に分けて考える契機を得た。漢字の受容は、単にそれまで文字をもたなかった日本人が、文字 (漢字) をもったという単純なものではなく、日本人の思考、認識にも激震的な作用、影響を及ぼしたと考えられる。この点は従来考えられぬ漢字の効用というべき。

事はモノゴト・デキゴト・シゴトと、時間的にも対象そのものとしてとらえられた。一方、言は、言・言葉・言語として、口約束であり、言い伝えである。文字によって、瞬時に消える音声を

定着させる、存在そのものということである。

同様に本来は一体と考えられていたモノも〈者〉と〈物〉に分化された。モノはコトとも同様の内包をもつ思惟の世界の存在であった。森羅万象ことごとくココロありと見え、モノとして者も物も一体と思惟していたのである。具体的にも、本来の日常語では、〈翁あり (あります) 〉／〈書物机上にあり (あります) 〉と、存在詞アリで者も物も区別することなく一体として思惟し、表現していた。しかし近代語になって、イル (心あるもの) とアル (非心あるもの) とに区別し、表現するようになった。日本人社会の進歩、進化は心あるモノと、そうでないモノとを観念的にも分け、漢字の受容により、〈者〉・〈物〉と文字 (漢字) の選別が行われた。両者を峻別する絶好の契機が与えられたのである。

こうしたコトやモノと同様に、ナも〈名〉と〈字〉に分化させた。名 (名称) による区別、名目をそのまま実体アルモノと一体と考えていた——例えば『万葉集』などにおいても、女性が名を告げるコトが即、その男性に身も心も与え、許スコトと考えられ

杉 本 つ と む

た。古代からの日本人のものの考え方、とらえ方として、名は実体そのものであり、それを内包していると考えていたのである。

しかしやがて、表意文字である漢字の受容はこうした一体観を名と字とに峻別、後者は記号として、それまで日本人には存在しなかったもの（文字）により、峻別し、永く存在させる方式を考えさせた。たとえば、ナクはシナの漢字では、〈泣・鳴・啼・哭〉など個別的であるが、日本語ではナクという生理的、心理的現象を現代においても一つの言葉、〈ナク〉で示し、充足しているのである。〈悲鳴〉などと人について用いても例外ではない。〈男鳴き〉なども近世にあつて、当然の表示法である。あるいはそれだけ抽象的（未分化）か。あえていえば、ナキカタを形容する修飾によつて区別しているわけである。〈めそめそナク・血の出るようにナク・さめざめとナク〉などなど、一例である。ここに文字（漢字）という絶好、絶大な記号を手段として受け入れ、獲得する大いなる契機、幸運がおとずれたともいえるのである。

〈仮名〉と表記されたものは、仮リノ名乗、名称であり、〈仮字〉——漢字を〈真字〉とよんだのに対し——は、日本独自の文字として創造され、カナ（カンナ）とよび、〈仮字〉と表示し、表現した。漢字では充足できぬ日本語を創造したわけである。この点は、シナ語と日本語がコトバとして異系・異質であり、体系的にも、根本的構造においても異なるという本質ともふかく関わるのである。言語学的に、孤立語（シナ語）と膠着語（agglutinative language 日本語）とつて形態的に区別するのである。具体的に、いわゆる重箱読とか湯桶読などと俗称（後者は「湯桶文章」の形で

中世にみえる）された日本的漢字用法、漢字・仮字系のことばこそ、——さながらある種の日本・シナ両語の混合体ともいふべき語の形態であり、正規をはずれた邪道などと誤解されているが——むしろ正當な、日本人の創造した漢字活用の大切な面であると断定すべきだったのである。

また俗に〈宛字〉などというが、これこそ日本人の漢字運用の妙、知恵の創造性を明示しているわけである。先にあげた〈ナク〉の、形容する言葉と一体の表現も、その精神構造は同様といえよう。しかし、識者もシナ語の漢字文化に圧倒されて、漢字と固有の日本語との融合に気づかぬままにすごした。しかしまた、漢訳仏典の漢語は、その点、シナのそれと異なつて、日本人には有効な表現、文字表記のサンプルとして注目すべき選択肢となつた。すくなくとも、漢字の日本語としての活用にある種の有効な示唆を与えたと思われる。〈所説・微妙・演説・清潔・結局・要請・満足・一切・心切（親切）〉など、シナ語にはない、漢字による日本語であり、仏典からの借用として効用があつた。

鎌倉期の古辞書の一つ、『観智院本類聚名義抄』には、〈字辞忝反 ナ／ナツク・アザナ〉とみえ、〈字〉にナを対応させている。ちようど、コトやモノの場合のように、ナも名と字に分化すると考えたのである。そして、中世の辞書『運歩色葉集』には〈真字〉がみえる（〈仮字〉はみえない）。

字をナと呼び、〈假（仮）字〉と書いてカナも定着したのである。史的プロセスをみると、『早大本節用集』（写本）に〈假字〉とあり、他に節用集系のもの——たとえば黒本本や天正十八年本など——

も、〈假字〉とみえる（亀井孝・高羽五郎編『五本改編節用集』を参考。但し前者（黒本本）にはその註記に、「日本」字形也又作「假名」）とあり、そろそろわたくしのいう俗用（假名）がみえはじめる。十六世紀に近づくと、慶長二年（一五九八）の識語をもつ『易林本節用集』に〈假名〉がみえ、〈假名〉が定着してくるようになる。江戸期の『早引節用集』の類は、この流れを継承し、〈假名書〉も出現する。

このようにして、近世にはいれば、文学のジャンルに仮名草子が見え、辞書、字引などはもとより、戯作、演劇（浄瑠璃・歌舞伎など）の脚本類の世界でも、ことごとく俗用の〈假名〉が力を得、普及して一般的となってくるのである（この勢力は幕末、明治期、現代へとつづく）。ときには、〈假名文字〉（『警噺尽』）などの俗用まで出現してくる。〈名〉が〈字〉を駆逐してしまうのである。

以上が〈假字・仮名〉の史的展開の一端である。しかし節用集の伝統に立つ享保二年刊の『和漢音釈書言字考節用集』には、〈偏假字／假名文字／真字〉など、まだ〈字〉の存在もみられ、〈名〉と〈字〉とが混在する。寛文九年刊の『増補下学集』では、〈假字〉とみえ、〈假字〉は江戸初期までは、それまでの伝統、正当な表記・表現として伝流している。いわば近世初期はまさに俗用の〈假名〉と、正当なる〈假字〉との分水嶺期ともよぶことができる。中世から近世への過渡期こそ注目しておきたい。やはり十六世紀ごろから〈假字〉↓〈假名〉と俗用がみえ、十七世紀にはいると、多く一般的に、〈假名〉を用いるようになったことが判明する。江戸時代の代表的百科事典、正徳五年刊の『和漢三才

図会』も、〈假名・片假名〉と俗用である。もつともこの著者（寺島良安）は、文字に素人ゆえである。

近代にはいり、国家的考察ともいえる資料、『假名源流考及證本寫眞』（国語調査委員会・『假名遣及假名字體沿革史料』（大矢透）など、いずれも〈假名〉と俗用がみられる。ちなみに、「古典文庫」（吉田幸一、その他の編）の書誌でも、多くの古典翻刻にもかかわらず、〈假名・仮名遣い〉と俗用が主である（送られてきた古書目録などにも、〈假名文字遣 大友信一・木村晟／仮名表記論攷 今野真二／定家仮名遣の研究 遠藤和夫 などとある）。

それにしても『岩波古語辞典』に、「真名（まな）・仮名（かみな）」などであるのは、古語の辞典と名乗っている点、史的考察の点からして、まことに遺憾千万というほかない。折角、ナを名と字に分ける觀念上、言語社会学上の峻別、もしくは、歴史的使用の点を明白にしているのに、それらを無視して古代語も近代語も混同している。

厳密な科学的考察を期すべき言語の学の関係書にも、このように近世的俗用が受けつがれ、ことに明治以降、定着してしまっている。その責任の大半は東京大学出身（系）の国語学者にある。私見では、〈字〉と〈名〉との象徴的、非国語学的ともいうべき論考は、橋本進吉博士の論述である。すなわち、石塚龍磨著『假字遣奥山路』（日本古典全集刊行会、昭和四年）の巻頭を飾った橋本進吉博士の論文、〈国語假名遣研究史上の一発見——石塚龍磨の假名遣奥山路について——〉がまさしく典型で、注目される（原本を無視した書名の引用、論考の記述）。折角、原本の翻刻には翻刻

者が、〈假字つかひ奥の山路／假字遣奥山路〉（序、柱など）と忠実に明示しながら（正宗敦夫の担当、解説・論考の担当者、橋本進吉博士は、〈假名遣奥山路〉で解説している（論文中の小見出し、同柱なども）。さらに考察のご本人の記述でも、〈假名・假名遣・表音的假名遣・歴史的假名遣〉など、俗用の用語がみられる。ついに〈假字〉は同論考から、完全に姿を消している。まさに石塚龍磨の忠実な原本考察の論述までも無視されているわけである。もとより本居宣長など、江戸時代の国学者たちは、その論考に〈假字〉を用いて例外はない。村田春海『假字大意抄』、伴信友『假字本末』など、正道を行く〈假字〉である。幕末、帆足万里に『假名考』をみるが、もとより彼は専門学者ではなく、その論考も特に問題にすべきではなからう。

おそらく〈假字〉について詳察した研究の書の一つとして、逸することのできぬ労作は右にあげた『假字本末』に指を屈すべきであろう。以下、勉強社文庫の影印本及び伴信友全集の翻刻などにより、いささかその内容を紹介、吟味してみよう。

同書には、古辞書類での考証はみえないが、古代よりの古典籍などを引用、参看して、〈假字〉の小史をつづっている。『凌雲集』を引用しては、〈是ぞ假字製れる事の明かなる證なりける〉^{アカシ}といひ、〈行阿の假字遣の序〉や〈河海抄^{源氏物語極ガ}抄^{後ノ巻ノ条ノ}〉などを引用して、〈假字〉の例を実証してゆるきがない。その他、〈大井川行幸の時奉れる歌の序・古今和歌集の序・堤中納言ノ物語〉などからも引用して、〈假字文書熟たりける世の久しさ、おしはかるべし〉などとみえる。また、『土佐日記』を引用して、〈男もじにさまを書

出して云々とは、歌の趣を、真字^{マコ}にて漢文に書出して……草假字を女手、真字を男手^{オトコテ}ともいへり〉などとみえる。また信友は、多くの研究書を引用しているが、藤原長親『倭片假字反切義解』を引用し、〈国家ニ用^{フル}ニ文字^マ有^リ真字^{マコ}有^リ假字^{カナ}、真字^{マコ}ハ、假字^{カナ}ニ正也、假字^{カナ}ハ、真字^{マコ}ニ權也。字ノ名義、即物ノ名也〉^ナといひ、註記して、〈字ノ名義ハ云々とは、字を奈^ナと云ふ由は、何にまれ、物ノ名を記す義なりと説^イへるなり。天武紀に新字とあるを、古訓にニヒナとあり。さて假字を正しくは、加利奈と云ふべきを、音便に加無奈と云ひ、また加奈とも云ふなり〉などとみえる。なお吉備ノ真備が、〈片假字〉をつくったという伝承も考証するなど、全卷、〈假字〉の史的考証に筆をついやし、労作と評すべきであろう。蛇足ながら、ここでも同書（勉強社文庫）の解説担当の峰岸明氏は、〈本書は、仮名の起源、沿革を研究、考証したもの〉と、〈假名・片假名〉など、その用字に俗用の例がみられる。先の橋本進吉博士による論考と同じである。真の研究者はいずれも、〈假字〉と認識し表記している。『嬉遊笑覧』（自筆本）では、論述の地の文に、〈假字〉と正しい用法を示しているの面白い例証とらう。

おそらく明治以降、権威ある国語学者の誤用（あえて）が正式となつてしまつて、多くの人が追隨してしまつたのではないか。これがために、拙論は一つの反省の証であり、警鐘ともなることを願う。国語学者の粹を集めて編集されたと思われる『国語学大辞典』（東京堂出版）も、〈假名・仮名遣〉とあつて例外ではない。

ここで、あえて参考までに、江戸期、日本語研究に力をそいだ本居宣長と富士谷成章の場合を紹介、吟味しておく。宣長の場合、『字音假字用格』でも判明するように、〈假字〉と正當な用字を駆使しているが、彼の随筆、『玉勝間』を一見すると、たとえば巻八に〈かんなまんな ひんがしみんなみ〉の小見出しで、冒頭にこうみえる。

假字をかななどはいふべし、真字^{マナ}をまんなといへるは、ひがことなり、かなは、もとかりな、れば、そのりを音便にんといひて、かななどはいふなるを、真字^{マナ}は、まんなといふべきことわりなし

また同書卷十一に、〈假字のさだ〉の小見出しで、つぎのようにのべている。冒頭より引用する。

源氏物語梅枝巻に、よろづの事、むかしにはおとりざまに、浅くなりゆく世の末なれど、かんなのみなむ、今の世は、いときはなくなりたる（中略）此かんなといへるは、いろは假字のこと也

さらに、卷十四に、小見出し〈假字〉として、つぎの記述をみる。冒頭よりあげる。

皇国の言を、古書ともに、漢文ざまにかけけるは、假字といふものなくして、せむかたなく止事を得ざる故なり（下略）

以上のように、さすが宣長は、〈假字〉を用いている。では富士谷成章はいかが？精査の結果未詳と結論したい（仮字表記のコト

バについては考察している）。成章の嗣子、御杖^{ミヅエ}や門人は、俗用の〈仮名〉でみえる。

なお、『古今和歌集』には、仮名ノ序と真名ノ序があることは周知のところであろうが、「日本古典文学大系本」の『古今和歌集』（佐伯梅友校注）には、〈仮名序・真名序〉という小見出しを設定している。しかし原本にこのような小見出しがあるわけではなく、〈假字ノ序・真字ノ序〉とすべきではなからうか（先の『嬉遊笑覧』にその例証をみる。国語学者は好まぬようである）。なお、校注者の解説中に引用している「俊成本」の俊成の註記に、〈真名序・仮名序〉とある由、これも果たして引用の俊成註記が本人のもので、当時の写本といえるかどうか疑わしい（もっとも解説では仮字序と真字序の位置（前・後）を問題にして、表記については言及がない）。私見では、小見出しとしては、〈假字序・真字序〉とすべきで、本居宣長は『玉勝間』卷四の〈哥人また家集といふ事〉という小見出しで、〈古今集ノ真字序に見え〉と記述している。おそらく、原本には存在していないのであろうが、小見出しとしては、〈假字序・真字序〉と表示し、両序を問題にするなら、やはり時代的にも、〈假字序・真字序〉として論じるべきではないか。わたくしは宣長の記述を尊重したい。

終りに明治十年に編纂された『文藝類纂』（榊原芳野編・文部省版）を参考までに紹介しておきたい。同書の巻一・巻二は〈字志上・字志下〉とあり、巻一の〈例言〉では、〈漢字及片假名平假名等一に原書に従ふ實を主として華を要せされはなり〉とある。しかし、〈巻一目錄 字志上〉では、〈平假字及伊呂波論／片假字及五

十音論》などと示し、本文の解説文中にも、〈假字・片假字・平假字〉とみえる。但し、まことに不可思議ながら、小見出しに〈平假字及いろは〉とあつても、解説文のはじめには、〈平假名及伊呂波四十七字〉と〈平假名〉でみえる。また、〈片假字及五十音〉の小見出しで解説するところも、その解説文は、〈片假名は……〉と、〈片假名〉の表記ではじまる。なお参考書としてひく、『倭片假字反切義解』^{群書類従第百九十五所収}や『後撰集片假字本』・『假字日本紀』などの引用記述では、原本通りの表記で引用していると思われ、〈假字〉である。巻二も、〈字志下〉として、〈假字字源并別体／片假字字源并別体〉とみえる。おそらく著者は表記には無関心なのであろう。

このように仮字(平仮字)についても、片仮字についても、解説中の用語を含めて、全体として漢字表記では、〈假字〉とあるのが本書の用字といえる。そしてときに、著者は、〈片假名・平假名〉を、周囲のこのころの俗用を自ずと用いてしまった――裏返すと、著者に定見なしと評すべきであろう。それにしても、校正の際には異同に気づくべきで、草稿はともあれ、成稿し出版するときには、統一した用字、用語を示すべきであったと思う(この榊原芳野氏の解説論述には、伴信友の『假字本末』が多く参照、活用されていると思われる)。

なお、明治三十五年刊、赤堀又次郎編著、『国語学書目解題』を一見すると、その分類目録のうち、三(オ) 假名遣、(キ) 文字及伊呂波につきのような書名をみる(原則として書名のみをあげる。わたくしにイロハ以下の記号を付す)。

- (イ) 假名文字遣一名定家假名遣行阿假名遣 (ロ) 假名遣近道
- (ハ) 假字遣近道抄 (ニ) 類字假名遣 (ホ) 假名字例
- (ヘ) 初心假名遣 (ト) 萬葉假名遣 (チ) 假字大意抄
- (リ) 雅言假字格 (ヌ) 假名遣古意 (ル) 古今假名遣
- (ヲ) 今古假字遣 (ワ) 假字本義考 (カ) 假字考(岡島隆起)
- (ヨ) 假字遣秘解 (タ) 假名字抄 (レ) 假字考(岡田真澄)
- (ソ) 假字本末 (ツ) 假字本末辨妄 (ネ) 假名類纂
- (ナ) 假字真字鏡(これのみ明治三年刊)

以上のように、〈假字〉と〈假名〉が混在している。おそらく編者には〈字〉も〈名〉も関心外だったと思われる。

私見で示したように、国学者およびその系統の著者のものは、例外なしに、〈假字〉と正解である。伝統と厳密さを尊重すべき国語学の分野において、まさしく明治期以降、〈假名〉が〈仮字〉を完全に駆逐してしまったのである。この小さな拙論によって、百年の誤りが直ちに訂正されるとは考えもしないが、〈假名〉を排し、〈仮字〉を正式とし、且は伝統ある先人苦心の研究魂と事実を受けつぎ発展させるべきと考える。しかし思えば、この正道につくことは、百年河清ヲ俟ツの感を抱かざるを得ない。

※補註 参考資料とした明治四十二年刊行『假名遣及假名字體沿革史料』(帝國學士院藏版)の〈小引・凡例・目次〉などにも、例外なく拙論で考察した誤用、俗用の〈假名〉が用いられている。象徴的論考として、明治以降の〈假名〉絶対観の姿をみる。残念至極である。